

叢林の草花

叢林とは樹木が群がって生えている林や禅宗寺院をさすが、金戸は専徳寺庭園竹林と中仙道川筋の杉林の植栽である。一帯にはモウソウチク・サクラ・カシ・ケヤキ・杉・ホウノキが高木であり、中低木のアオキが群生する中に柿・カエデ・ヤツデ・サンシヨウ・センリヨウ・マンリヨウ・ヤブコウジ・ツバキ・ササ類などの低木が混在している。また草花としてウド・ゼンマイ・ワラビ・フキ・ミヨウガ・ユキノシタ・ホオズキ・ドクダミ・ミズヒキ・ツワブキ・ツクシ・シソなどの薬草や山菜がある。

その他の花木には、ギボウシ・ヒオウギ・ムラサキシキブ・シヤガ・タデホタルブクロ・ナルコユリ・ヨモギギク・アザミ・イタドリ・アザミ・ミヤコワスレが植栽している。



ヤブコウジ (十両)

中地山の草花

昭和三四年発刊の『城端町史』に「立野ヶ原台地の植物」の項があり、「立野ヶ原台地並びに湿地は他地方に見られない相をもっており、中でも秋のキ



エンナの芝

キヨウ・ハギ・オミナエシ・オトコヘシ・リンドウ・ススキ等の台地性のものが群生し、カワラケツメイ・クサムネ・ネジバナも繁り、湿地帯のミズゴケ・サワキキヨウ・オホバニガナ・ミノハギ・ミズギク・モウセンゴケが群生し、その間に夏に開花するサギソウなどの混ざる様相はまことに美しい」とある。

それが平成一六年に発刊された『城端町の歴史と文化』には「今日これを読むと夢のような光景で、今ではキキヨウもサワキキヨウもサギソウも全く見ることができない」と土地開発による野生動物の生息、生育環境が著しく変化したと記す。

立野ヶ原台地の変貌は著しいが、金戸の墓場辺りの雁巻島や京塚には開発を免れた一帯が残っているのだ。

本所の叢林と共にエンナという自生の芝が、大井川の土手に生えている中地山の自然も残すべき場所として記録と記憶に留めたいものである。

道端や休耕田の草花

道端に生える植物は、雑草として切り払ったり抜き取ったりして除草が繰り返されるがなかでも、雑草のような強さである。車や人の歩く道端にはオオバコをはじめ、名前の覚えられない多くの雑草が生えている。

オオバコ・セイヨウタンポポ・スギナ・ゲンノシヨウコ・ヨモギ・ドクダミ・ツユクサ・カラムシ・ススキなどを目にするが、交通網の発達や都市化の進展は、空き地や公園、道路などの植物の世界にも影響を及ぼし、タンポポがその良い例であるが、昔からのエゾタンポポがほとんど見られなくなり、今ではセイヨウタンポポが蔓延している。

また四五年から減反が始まり休耕田が目立つようになり、転作の麦作の後に放置される田には、エノコログサ・メヒシバ・タイヌビエ・イボクサ・ツユクサ・スベリヒユ・タカサブロウ・エノキグサ・クワクサ・ヒメムカシヨモギ・アゼムシロなどが生えている。

また越年して放置するとススキ・ネム・ハンノキなどが入り込んでくると云うが金戸には放置された田畑は無い。

トゲミノキツネノボタン

富山県で最初の欧州原産で一年草の帰化植物のトゲミノキツネノボタン（刺実の狐の牡丹・トゲミキンポウゲとも呼ぶ）が、石橋友吉の畔に生えているのを二〇〇五年五月ごろに、元城端町教育長水上成雄氏が城端中学校長の通勤中に、駅前から城南橋に至る道筋で見つけた。現在は芝生に張り替えてられている石橋友吉南側の畔に群生していたのを、富山県植物園で富山県で最初のトゲミノキツネノボタンの自生と確認されたのであった。

名のとおり果実にトゲが見られるのが大きな特徴であり、道路、街路樹の植栽材であり見逃すほどの小さなキンポウゲ属である。

高さは20センチとどかないサイズであり、根生葉は直径数センチで、両面とも無毛。花は四月から五月にかけて咲き、直径一・一・五センチである。

水上成雄氏によれば、秋の収穫後に肥やしとして播く牛豚の糞に混在したものであり、家畜の飼料に混じって運ばれたものと推測されていた。



カラムシ



カワラケツメイ

名のない雑草はない



トゲミノキツネノボタン



エノクログサ



ドクダミ



クサムネ



モウセンゴケ



メシバ



イヌビエ



スギナ (ツクシンボ)



ミズヒキ